

喪失

夕暮れの空間は

ビルの凹凸の稜線で区切られ

凹凸の影のなかを今しも

寒々とした葬儀の列が進んでいく

繁栄という愚直のきわみの

滑稽なまでに頑強な構築物

茶番劇じみた影のなかの葬列は

臃ろに人の輪郭をなして進む

生き残ったものの慣わし

弔いの言葉もむなしく

薄暮の中へ消えていく

魂を宿していた肉片の

野辺のおくり

言葉の亡き骸もお葬いだ

涙も怒りも果てた

早春図

細い散歩道の両側は黒い土の畑で
梅の木が花を咲かせてはじめている
浅い春の雪のとき万葉びとは
白い雪はとけても白い花は残れと
春を迎えた

犬に引きずられた子供が声をあげながら
古墳じみた雑木林の方へ行った。

あそこには絶好の日溜まりがあるのだ。

弥生縄文もつと前の人もそんな所で

陽の温もりを愉しんだにちがいない。

かれらの骨や肉は分子となり

宙へ海へ土へと還る。

黒い地面の下では今新しい芽が

萌えださんとしている。

その息遣いがきこえてくる。

雑木林でも生命の躍動のときに向って

転生再生の確かな気配がしている。

欠落

夜の底で

いくつもの銀河がさらさらと

さらさらと煌き、

「ビッグバン」生誕幾々億年という。

月日は速いのだ。

野卑で鈍重な経済学者は

相もかわらずただひたすら、

四囲を便利なガラクタで充たすことに

専念している。

ひとはガラクタのなかで

自足したり挫折したり、

心は理想的に壊れていき、

病んだ魂は瓦礫をまえに茫然と

居場所もなく

時代を跋扈する魑魅魍魎の精神が

従順ならざるものの肉塊をも

刑死へとおいやるのだ。

銀河天の河の

太陽系第三惑星に棲息する

霊長類として、

自然の社会の探求者が

霞だけで人間が存在できる

未知なる深遠な理論を見つけだしたら、

それをこそ知的生命体の誉れをたたえ、

星々をかたどったメダルを授与し、

その栄光に神の称号も贈ろう。